

2021. 4 のブログ：デカルトのコギトエルゴスムについて、の詳細  
(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index.html#2104> )

## デカルトのコギト・エルゴ・スムについて

中所武司

### ■このブログのきっかけ

2021. 4. 3 の朝日の記事

<https://digital.asahi.com/articles/DA3S14858178.html?pn=2>

「(古典百名山：98) デカルト『方法序説』 大澤真幸が読む」の書評に  
「■考える私は存在するのか」という見出しを付け、  
最後に、評者自身の下記の意見が述べられている。(文番号は本文での説明用)

- ① デカルトは、「私は考える」と「考えるモノの存在」とを直接的に繋ぎすぎている
- ② 私が考えているとき、その思考の内容として絶対にたち現れないのが、  
まさに考えているこの私である
- ③ 「私は考える」は「私の存在」へとアクセスできない
- ④ 「コギト」と「スム」の間にあるのは、順接(エルゴ)ではなく、  
深淵(しんえん)ではないだろうか

文②で、「私は考える」と「私は考えると考える私」の関係を論じており、  
私の興味を引いた。

### ■関連する私の過去の記述

まず、2018. 10 の以下のブログでの私のコメント(→★の部分)を引用する。

(参考) <http://www.1968start.com/M/blog/1810BookKodoku.pdf>

「孤独の発明 または言語の政治学」を読んで

[引用1]

原本の2章【観法の地平】の中で、小林秀雄が、  
「まどひきてさとりうべくもなかりつる心を知るは心なりけり」という  
西行の歌について、自分が自分について考えている、つまり  
自分は自己言及の悪循環に陥っているのだから、  
悟りえないのは当たり前なことだ、と述べていることに関して、  
私のコメントは以下の通り：

→★この「心をしるは心なりけり」という「自己言及の悪循環」と類似のことを  
過去に経験している。

私の1971年の修士論文「思考過程の数学的表現と模擬実験」の終章で、次のように記載：  
「思考は、人間の所有物でありながら、それは所有権なき所有であって、  
我々は、それを支配することはできない」  
「思考についての研究が、その思考によって行われるというジレンマから逃れることが  
できないとすれば、我々はすでに第1歩からつまづいていることになる」

(参考) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm>

1970年の研究会での発表「思考過程のシミュレーション」では、次のように記載：  
「『考えることを考える』という一人二役的困難さのために、  
一方の役を熱演しすぎると、他方がおろそかになる」

(参考) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/gakkai7012.html>

1986年の勤務先の所内報に「考えている私を考えている私は誰?」という随筆を執筆

(参考) <http://www.1968start.com/H/8604WhoAmI>

[引用2]

原本の6章【光のスイッチ】の中で、  
『私は私の中で起こっている思考を持続させようとしているが、それは  
私が思考しているということではない。ある思考が私の中で生起しているにすぎない。  
そう考えさせるのである。そしてその思考を私という場にもたらしめているのは、  
私という現象をはるかに遡る、眼の誕生であり、言葉の誕生であると思わせる。』  
と述べていることに関して、私のコメントは以下の通り：

→★2章の「心をしるは心なりけり」という「自己言及の悪循環」へのコメントを  
ここで再掲する。むしろ、ここでコメントしたほうが適切！

(注) 上記の私のコメントと同じなので、再掲は省略

★この本によれば「考えている私を見ている私」という表現が適切？  
「見ている私」は主体で、「考えている私」は対象ということになる？

[引用3]

同じく、原本の6章【光のスイッチ】の中で、  
『見るという行為がはじめから俯瞰する眼をともなっていたということ、つまり、  
見ることが完全に遂行されるためには、現に見ているというその行為をさらに  
見ることが必要とされ、現に見ている以上、いわば「離見の見」（世阿弥）もまた  
ともに実現されているのだということは、見るということにははじめから  
共同性の次元が付与されているのだということの意味している』  
と述べていることに関して、私のコメントは以下の通り：

→★前項に同じ

離見の見（りけんのけん）とは：

世阿弥が能楽論書「花鏡」で述べた言葉。

演者が自らの身体を離れた客観的な目線をもち、

あらゆる方向から自身の演技を見る意識のこと。（能楽用語辞典から引用）

[引用4]

同じく、原本の6章【光のスイッチ】の中で、  
『日本人から見れば、西洋思想はひたすら「われ思う」をめぐって  
無駄な努力をしてきただけではないかと思われるほどだ』  
と述べていることに関して、私のコメントは以下の通り：

→★この意味はよくわからない。

「われ思う、ゆえにわれあり」に関して、

「われ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う」と書き加えれば、

後の「われ思う」が俯瞰する眼、すなわち「われ見る」ということでいいのでは？

さらに、以下のような繰り返しも考えられる：

「われ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う・・・」

[引用5]

原本の14章【視覚革命と言語革命】の中で、

『言語の領域には正解などというものは存在しないのである。解釈は無限に続く』

『デカルトの疑いにしても同じことだ』

と述べていることに関して、私のコメントは以下の通り：

→★6章で述べたコメントの再掲：

以下のような繰り返しも考えられる：

「われ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う・・・」

## ■評者自身の意見と私の過去の記述との対応

評者は、文①で、「私は考える」ので「考える私は存在する」との論理は単純すぎると述べている。

その理由を、文②と文③で述べている。

私が考えているとき、その思考の対象として、それを考えている私の存在は

絶対にはありえないからである、とのことである。

これは、オブジェクトレベルとメタレベルの記述を想定すれば、当然であろう。

私の場合は、すでに述べた下記の表現となる。

「考えている私を考えている私は誰？」

「われ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う・・・」

「『考えることを考える』という一人二役的困難さのために、

一方の役を熱演しすぎると、他方がおろそかになる」

「思考は、人間の所有物でありながら、それは所有権なき所有であって、

我々は、それを支配することはできない」

以上